

日中間の現実的ビジネス課題をテーマとした ブレンド型学習における産学連携授業の改善

Improving Industry-University Collaboration Classes in Blended Learning Themed on
Realistic Business Issues between Japan and China

濱崎あゆみ* ** 合田美子* 喜多敏博*
Ayumi Hamasaki* ** Yoshiko Goda* Toshihiro Kita*

*熊本大学大学院教授システム学専攻 **北京語言大学東京校
*Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University
**Beijing Language University Tokyo Campus

<あらまし>本研究では、日本人学生と中国国籍ではない留学生が日中間ビジネス上で現実的に起こりそうな課題テーマを見直し、ブレンド型学習を活用した PBL 型授業設計の改善案を作成する。学生達が課題解決に向け、企業や中国本土とつながり、チームを巻き込みながら働きかけることができる「協働力」スキル習得に向けた日本人学生と留学生間の PBL 型授業における改善を図る。

<キーワード> ブレンド型学習, 産学連携, PBL 型授業, Moodle

1. はじめに

近年、高等教育において「教員が何を教えたか」よりも「学習者がどんなスキルを身につけ、何ができるようになったか」に重きを置く PBL 型授業 (Project Based Learning) の実践研究が多く見られる。

筆者が勤務する北京語言大学東京校でも 3 年次の必修科目としてキャリア関連科目「キャリア指導Ⅱ」において、2022 年度より日本人学生と中国国籍以外の留学生 (以下、「留学生」) が各チームに分かれ、企業から課題を与えられ課題解決に取り組む PBL 型授業を実施している。

これまでの、ビジネス関連資格テキストを用いて接遇の基本や異文化適応力を学習していた。しかしながら、座学の学びだけでは、暗記型学習かつ机上の空論であり臨場感に乏しく、社会人未経験の学生にとって学習で得た知識とビジネススキルが結びつきにくい。そのため「何ができるようになったか」、「授業後どの場面で応用できるか」といった学習効果を学生自身が実感しづらい。

そこで本研究では、日中間ビジネス上で現実的に起こりえそうな課題テーマを見直し、ブレンド型学習を活用した PBL 型授業設計の改善案を作成する。学生達が課題解決に向け、企業や中国本土とつながり、チームを巻き込みながら働きかけることができる「協働力」スキル習得に向けた学習効果の有効性を

検証する。

2. ブレンド型学習での PBL 型授業

2.1. 授業の概要

本授業は 3 年次後期の必修授業 (2 単位・全 15 回・90 分/回) で、グローバル人材育成に向けたビジネススキルを学ぶ授業である。本研究では第 11 回から第 15 回までの産学連携による PBL 型授業を扱う。対象者は、9 月入学の学生計 7 名の学生が受講する。国籍の内訳として、日本 2 名・ベトナム 3 名・ネパール 1 名・ミャンマー 1 名で構成されている。

学習目標は、異なる言語・価値観・文化背景を持つ者同士が関わり合いの中から自らの強みを活かし、課題解決に向け、チームを巻き込みながら働きかけることができる「協働力」スキルの習得である。

15 回では、日本企業の中国ビジネス進出にむけた特化型ビジネスコンサルティング事業を行う A 社の社員 3 名を迎え、商品提案報告会を行い、フィードバックをもらう。(表 1)

表 1 : 授業内容 (概要)

回	授業内容 (対面授業)	必須課題 (LMS 教材)
11	テーマ確認 グループ結成	グループ結成報告書 商品アイデア出し
12	ニーズ分析	中国本土へ向けたアンケート紹介

13	中国ビジネス 展開する上での 留意点	「提案書」仮提出
14	報告会リハーサ ル	「提案書」本提出
15	報告会	リフレクションシ ート

2.2. 前年度授業での課題

前年度授業実施直後、学生と企業によるヒアリング調査を実施した。前年度の課題テーマ「中国にまだ出回らない日本の商品をこれから中国本土へ新ビジネスとして展開する」に対し、学生と企業それぞれの立場から以下のコメントをもらった。

【学生コメント】

- ・日本にない商品を考えるのは難しかった
- ・まだ中国に出回らない日本の商品を調査するだけに時間と労力がかかってしまった
- ・どの世代に向けての提案なのか課題の曖昧さからどう提案するとよいのか戸惑いがあった

【企業コメント】

- ・学生もプレゼンテーションで終わりではなく、より達成感が得られたり、実際に企業へプレゼンテーションを行うことにより就職活動時の強みにできたりするとさらに良い
- ・データの使い方の甘さなど、実務レベルではまだまだ改善すべき点もあるが、ブラッシュアップすればよいビジネスプランになる
- ・もっと学生独自の自由な発想と創造力に富んだ提案をしてもらいたい

学生と企業コメントより、学生と同世代にターゲット層を絞ることで取り組む課題に対し親近感を持ちより「自分ごと化」させること、中国にまだ出回らない商品という限定条件から商品選択を自由にするにより「中国本土の若者世代をターゲットにこれから中国国内でヒットする商品の提案」というこれから中国進出に向けビジネス展開することを考えている日本企業からの提案という現実が起こりそうな課題テーマ設定を見直し、変更することとした。

2.3. 課題テーマ設定の見直しによる改善点

本研究では、「中国本土の若者世代をターゲットにこれから中国国内でヒットする商品の提案」というビジネス現場で起こりえそうな

課題設定に見直すことにより、以下3点の授業改善を作成した。

1 点目の授業改善として対面授業では、①チーム内1週間内の貢献度を相互評価・自己評価を実施する②チーム内同期型ディスカッション③各チームの進捗状況をその都度クラス内発表で情報共有する④学生同士による質疑応答・教員（ファシリテーター）への相談を授業内で各回実施するように改善する。

2 点目の改善として、新たに Google 共有フォルダを作成し、格納先として指定する。企業から継続的にコメント・フィードバックをもらい、報告会本番前に複数回の軌道修正できるように練習の繰り返しを実現する。各回の中間成果物を学生は格納先へデータを保存・共同編集を行い、企業の方へ閲覧（コメント可）権限を付与し、各チームへのコメント・フィードバックを可能とする。前年度は、報告会当日1回のみしか企業からフィードバック・コメントをもらう機会がなかったが、学生達が外部評価から失敗経験を繰り返し、成果物の精度を上げていく、ブラッシュアップできる学習環境を新たに加えることとした。

3 点目の改善として課外活動への取り組みにおいて、中国本土のターゲット世代へのアンケート調査では Google フォームが中国国内では使用できない旨だけを伝えることとする。学生達が課題に取り組むにあたり、ビジネス現場でも起こり得る障壁を意図的に作り、これまで他科目での学習経験である中国語や中国に関する文化や国の情勢といった知識・スキルを活用する課題テーマに変更した。学生達にとって、これまで他科目で得た知識やスキルを活用した横断的学習を通し、実際の日中間ビジネスでは起こりうる障壁に挑戦できるような学習環境の改善を行なう。

3. 今後の計画について

今後は、改善した授業を実施し、受講学生7名に対し、形成的評価を行う。授業後「協働能力」スキルを習得できたか自己評価とチームメンバーによる他者評価による検証を行う。

また、報告会実施後 A 社社員3名を対象に授業改善に対するヒアリング調査を実施し、前年度授業との比較を行う。

参考文献

鈴木克明(2015) 研修設計マニュアルー人材育成のためのインストラクショナルデザイン。北大路書房